
silence mirage

る〜し〜1 2 世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s i l e n c e m i r a g e

【Nコード】

N 7 8 2 4 Q

【作者名】

るゝしゝ12世

【あらすじ】

寂れた大型スーパーにたまたま立ち寄った高校生の少年は、3階のゲームセンターで一人の女子高生に出会った。

——仄暗くて、不思議なお話です——

肌に刺すような痛みを伴わせて吹き抜けていく風に、首に巻いたマフラーをなびかせながら、少年はある場所へ向けて自転車を走らせていた。

少年にとって、高校生になってから二度目の冬。

学校からの帰宅途中、少年は用をたしに、ある大型スーパーの駐輪場に自転車を停めた。

少年の名は、城崎^{しろぎき} 春^{はる}。

髪型はあまり気にしていないのか、自然に伸ばしただけの無造作な髪が風に煽られている。

背格好は160センチと高校生男子にしてはやや小柄で、細身ですらりとした体格、紺のブレザーにグレーのチェック柄のスラックスの上には、黒のコートを羽織っていた。

首には前述した緑のマフラーが巻かれている。

春は出入口の自動ドアをくぐると、エスカレーターとサービスカウンターの間を抜けてすぐ右手側にあるトイレに入った。

この建物は3階建てで、1階に大本のスーパーがあり、2階から3階にかけては様々な店が入っていた。

しかし、それは過去の話といいいい。

春は小さい頃から母親に連れられてこのスーパーによく来ていた

が、最近はめっきり来なくなっていた。

近くに大型ショッピングモールができたために、最近はその足を通わせることが多くなっていたのである。

トイレで用を済ませた少年は、出入口の前まできてふと立ち止まった。

春が最後にここにきたのは小学校を卒業した頃だ。それ故、1階の店内の様相はがらりと変わっていた。

春は昔を懐かしんで中を探検したくなったのである。

大型ショッピングモールができた当時は、客足が遠のいたこともあったが、2年近くが経過したこともあり、現在客の出入りは落ち着きつつある。

しかし、デパートの中はかなり廃れてしまっていた。

客足とともにテナントも退き、店内には空いた空間だけが広がっていき、現在では2階の半分以上はがら空き状態となっていた。

この分だと、3階にお店は入ってないだろうと春は思った。

過去を追懐しながら2階の店内を回る春。

昔の記憶を頼りに書店や玩具屋、ペットショップを探し回ったが、そのどれもが撤退してしまっていた。

あったのは紳士服や化粧品売り場などで、小区画で営業をしていた。

2階の客の入りは数えられる程度。

1階のスーパ―の他に騒がしく営業していたのは、同じ1階にあ

る百円ショップくらいだった。

春は次に3階に上がった。

この階はもはや人の気配はなかった。

2階ですら人とすれ違ったのは2度だけだった。

3階まで足を運んでくる人などほとんどいないのだろう。

蛍光灯が照らし出す寂れた通路を進んでいくと、吹き抜けが現れた。

吹き抜けからは1階まで見下ろすことができたので、春はそこから下を覗いてみると、そこはフードコーナーになっていた。

丸や四角のテーブルが並べられ、その一つ一つを椅子が囲んでいる。

まだ夕方とは言えない時間帯だからか、座っている人は少なかった。

吹き抜けの一角には1階から3階までを結ぶエレベーターが2機あり、その隣には小さな池と噴水があった。

池の中心には小島のようなものが一つあり、そこにはヤシの木が植えられていて、三階吹き抜けの手摺り近くまで伸びて枝葉を広げていた。

噴水は、ヤシの木の小島を囲むようにしてたくさん並んだ小さな筒から水が出ていた。

エレベーターはガラス張りなので、乗り込めばそこから噴水を見下ろせるようになっていようである。

春は吹き抜けから3階フロアに視線を戻したが、よく見ると3階にお店は全くなかった。

なるほど、人がいないはずだ。

通路の電灯がついているだけならば、いつそのこと3階全体を封鎖した方がいいのではないかと春は思った。

しかし、そう思ったのも束の間。・・・

吹き抜けから更に奥に続く通路の先に、僅かな明かりを見つけたのである。

春が近づいてみると、それはゲームセンターのようだ。

全くなにもない3階の一角で、ゲームセンターだけが営業していたのだ。

それなら通路の蛍光灯を落とすことはできないだろう。

「ん？」

そこで春は、ある人影を見つけたのである。

春は人影を気にすることはせず、ゲームセンターに入って一通り中を見て回った。

しかし、客は疎か店員すら見つけられなかった。

いたのは、ここに来る途中に見かけた人影だけだったのである。

ふてくされた顔でユーフォーキャッチャーの景品を見つめる女子高生。

春はそのユーフォーキャッチャーの近くまで寄った。

肩まで伸ばした黒髪セミロング、背丈は春より10センチ程低く小柄で、顔も幼いせいか中学生に見えなくもない。

しかし着ている制服は春にも見覚えのある高校のものだった。

薄い紺のブレザーに赤のタータンチェックスカート、首には赤いマフラーを巻いていた。

女子高生は小銭を入れては失敗を繰り返していた。

「取れないの？」

女子高生は春の呼びかけに振り向くと、失敗を見られて照れたのか苦笑いを浮かべた。

「はい。私、こういうのは苦手です。でも、偶然このぬいぐるみを見つけちゃって」

ユーフォーキャッチャーに視線を戻した女子高生は、中のぬいぐるみの一つを指差した。

「家で買っている猫にそっくりなんです。だから、会わせてあげたいなーなんて思ったんですけど・・・難しいです」

それはパンダのように白に黒ぶちの入った猫のぬいぐるみだった。腹ばいになって心地よさそうに目をつむっている。真昼の縁側に置いてあげれば、さぞかし絵になりそうなぬいぐるみだ。

「俺もやってみるよ」

「はい、お願いします」

律儀に頭を下げて女子高生が一步退くと、春は持っていた手提げ鞆をユーフォーキャッチャーに立てかけて、ぬいぐるみの真正面に立った。

ポケットに入れた財布から小銭を出し、ユーフォーキャッチャーに投入する。

ボタンを操作してクレーンを移動させ、ターゲットのぬいぐるみの頭上へと上手い具合にもっていくことができた。

アームが勝手に下りて、猫のぬいぐるみに触れる。

「やった！」

しかし、ぬいぐるみを見つめる女子高生の期待もむなしく、アームはぬいぐるみをひっかけることなく上昇し、失敗に終わった。

「惜しいなー。あとちょっとだったのに」

春はぼやきながら財布からまた百円硬貨を取り出し、ユーフォーキャッチャーに投入しようとしたが、女子高生に引き止められてしまった。

「あの、お金は大丈夫なんですか？」

「ああ。少しくらいなら」

「ありがとうございます。私、もうお金を使い果たしてしまったので」

女子高生は面目なさそうに俯いた。

それから春は5回挑戦してみたが、アームが触れはするも、ぬいぐるみを取ることはできず、少しくらいと言っていたのに、とうとう所持金を全て使い果たしてしまったのである。

実は春はゲームセンターにあまり来たことがなかった。それ故、ユーフォーキャッチャーなどが得意というわけではないのだ。

「くーっ！ なかなか取れないもんだな。もう小銭ないし・・・」

「ごめんなさい。私が頼りきったばかりに」

「いや、君が謝ることじゃないよ」

春はふと、ゲームセンター内の壁にかけられた時計を見やった。
夕方5時を疾うにまわっていた。冬だけに、外に出れば空に星を
見つけることができるだろう。

「また明日もここに来るの？」

「もちろん、そのつもりですよ」

女子高生はニコツと微笑みながら答えた。

「そっか。なら俺も明日来よう」

「え？ いいのですか？」

「ああ。俺も意地でもあのぬいぐるみを取りたくなった」

「ありがとうございますー。心強いです」

その笑顔に春は一瞬うろたえてしまった。

彼女ともう少しだけ一緒にいたい。もっと話したい。

春は顔を強張らせると、思い切って帰り道を誘ってみることにした。

「あの・・・よければ途中まで一緒に帰りませんか？」

女子高生は一瞬瞠目したが、それから俯いてしまった。

「ごめんなさい。私、まだここを離れることができないんです」

「そ・そっか。ならいいんだ」

春が落胆を押し隠すように頭をかくと、女子高生はまた微笑み、小さく会釈した。

「誘ってくれてありがとう」

「ああ、じゃあまた明日」

「はい。また明日です」

春は女子高生に別れを告げると、手提げ鞆を取ってゲームセンターを出ていった。

吹き抜けの傍を通った時、そういえば、女子高生の名前を聞いていなかったことを思い出した。

すぐ後ろだから聞きに戻るのもいいが、明日また会えるのだ。その時間けばいい。

そして春は一人階段を下りていったのだった。

2

翌日、春は学校の帰りに約束どおりゲームセンターに寄っていた。

準備金は千円。

ユーフォーキャッチャーは二百円ずつ入れれば3回できるので、全部で15回できる計算だ。

だが、既に半分以上失敗し、現時点で残りの所持金は四百円、6回分にまで減っていた。

ぬいぐるみは景品を落とすホールには近づきつつあった。

春の操作でアームが何度かぬいぐるみに引っかかり、浮かすことはできた。

ただ、ぬいぐるみが重いのか、アームの力が弱いのか、すぐに落ちってしまうのだ。

「惜しいですね。後ちょっとなんですが」

女子高生の言うように、ぬいぐるみとホールまでの距離は30センチを切っていた。

最初はぬいぐるみからホールまでは今の倍以上も離れていたのがある。

近づきつつはあるものの、それでも残り6回でぬいぐるみが手に入るとは、春には到底思えなかった。

女子高生も準備金五百円を持ってきていたが、既に使い果たして

いた。

春はユーフォーキャッチャーから眼を逸らすと、周りをぐるっと一周見渡した。

「どうかしたのですか？」

女子高生は怪訝そうに春に尋ねた。

「いや、店員はいないかなーと・・・」

女子高生は更に不思議そうに春の顔を覗き込む。

「店員がいれば、ぬいぐるみの位置を近づけてくれたりして、少しでも取りやすくしてくれると思ったんだけど」

「なるほど」

疑問が胸に落ちたのか、女子高生は胸の前で手を叩くと、にこりと微笑んだ。

「店員の方はそんなことをしてくれるのですね」

「まあ、大きいゲームセンターならね。でも、こういう小さなところでやってくれるかどうかはわからないけど」

答えながら春はまた店員を探してみたが、やはり見つからなかった。

「店員の方はいらっしやらないみたいですね」

「そうだな。いくら人が来ないからって、店を放ったらかしにするのも程があるだろ」

春はぶつくさとぼやきながらも、仕方なく更にお金をつぎ込んだ。しかし、今度はぬいぐるみにアームがかすっただけでひっかかることはなかった。

「ふー、集中力が切れてきたかな」

春は体中にたまっていた緊張を吐き出すようにため息をつくとき、更に三度深呼吸を繰り返した。

「頑張ってください。応援してます」

女子高生にそう励まされた瞬間だった。

春は突然立ちくらみに襲われたのである。

（あれ？ 集中力が切れたにしても、この立ち眩みは・・・？）

視界が霧にのまれるかのように急速に白く霞んでいく。

女子高生も、ユーフォーキャッチャーも見えなくなり、意識が朦朧となって、春はそのまま深い眠りに落ちてしまったのである。

>

「・・・み？」

頭の中へと流れ込んでくる声。

「・・・い？ おい？ 君？」

その声は、聞いたことのない声色だった。

それもそのはずだ。

春は眼を開けると、視界がぼやけていたが、次第にピントが合うように、眼の前にいる人影が鮮明になっていく。

「君！ 大丈夫か？」

声の主は、眼の前にいた警備員だったのである。

「え？ あれ？ 俺はいつたい・・・」

意識がはっきりしてきたのか、春は自分が今までここでなにをしていたのかを思い出した。

春はフロアの隅の方で、壁に背中を預けて座り込み、眠りこけていた。

フロア全体は闇に包まれていて、警備員の持つ懐中電灯の周りにだけうっすらと明かりが灯っている。

警備員は見たところ50代前半くらいだろう。帽子からはみ出た前髪に白髪がまじっていた。

警備員は中腰から立ち上がると、背丈は春より頭一つ分は高く、長年柔道でもやっていたかのような屈強そうな体格をしていた。まさに警備員にぴったりの体躯だった。

春はその警備員に突然妙な事を尋ねられたのである。

「君も見たのかい？ 彼女を」

「見たって・・・あの、もしかして女子高生のことですか？」

訝しそうな面持ちで聞き返す春。

警備員は無言のまま首肯した。

「そうか。やはり君も会ったか」

警備員は春に諭すように語り始めた。

警備員の話によると、5年前の冬、この付近で女子高生が交通事故で亡くなっていた。

事故を起こした運転手はそのまま逃走、未だ捕まっていない。

目撃者がいなかったため、車のナンバーも不明、警察も犯人の特定には困難を極め、暗礁に乗り上げたまま月日が流れていた。

その女子高生の幽霊が、どういうわけか春が今いる3階でよく見

かけられるようになったという。

そして立ち入り禁止となっている3階で、春と同じように眠りかけている人がよく見つかるらしいのだ。

無論、春はそんな話を初めて知った。

「じゃあ俺は、その幽霊と一緒にいたというのか？」

「そういうことになる。私は見たことがないがな」

愕然とする春。

だが、更なる真実が、春を驚愕させた。

今、春がいる位置は、ちょうどゲームセンターがあった場所と同じなのだ。

しかし、眼前にはまるで何もなかったかのように、空の空間だけが広がっていたのである。

春は言葉を失った。

確かにここには、ゲームセンターがあった。

そこで名も知らぬ女子高生とずっとユーフォーキャッチャーをやっていたのだ。

「立てるか？」

「あ・はい」

春は徐に立ち上がると、壁に立てかけてあった鞆を手を取った。

「とりあえず、ここは一般人の立入禁止区域だ。下まで連れてってやるよ」

それから春は警備員に案内されて通路を歩くが、来るときにしていた蛍光灯は機能しておらず、警備員の持つ懐中電灯の明かりだけを頼りに歩いていた。

階段を下りていくと、春はそこでまた驚愕に陥ったのである。

目にとまったのは、2階から3階へ上がるための階段の入り口を塞いだ、黄色いロープと関係者以外立ち入り禁止の立て看板。

来るときにはロープも立て看板もなかった。それは昨日来た時も同じだ。

春は自分の眼を疑った。まるで夢でも見ていたかのようだった。

3

次の日、学校からの帰宅途中に春は迷っていた。

大型スーパーの出入口の前にある通りで、自転車から降りて建物の三階にあたる部分をぼんやり見上げていた。

ゲームセンターで知り合った女子高生が、実は幽霊だった。

ゲームセンターも本当は存在していなかった。三階へ上がる階段も封鎖されていた。

全ては女子高生の幽霊がつくりあげた幻だったのだ。

では、どうして彼女はそんなことをしたのか。なぜ自分が誘われたのか。

そういえば、ぬいぐるみはまだ取ることができてないままだし、それに、彼女の名前も聞き逃したままだ。

謎が山ほど残っているではないか。

むず痒いままの胸中に、耐え切れなくなった春は、きっと三階を睨みつけると、

「ええい、ままよ！」

覚悟を決めて、駐輪場に自転車を停めたのである。

出入口を潜ると階段を上がり、2階で立ち止まった。

春の前に立ちはだかったのは、立入禁止の立て看板とロープ。跨がっていけば障害物にすらならないようなものだが、これが見えているということは、彼女は春がやってくることを拒んでいるのではないか。

「来るなどでも言うのかよ！　だったら尚更会いに行きたくなった！」

春はあっさりとロープを跨がると、三階へ向けて階段を駆け上がった。

明かりのない通路を抜け、吹き抜けを回り、ゲームセンターの場所に着いた。が、そこにゲームセンターの賑やかな明かりはなかった。

空っぽの空間だったのだ。

春はその場で立ち尽くし、長嘆息をつくど、突然怒声を放った。

「何だよ！　こうしてまたぬいぐるみを取りにきたってのに！　いろいろ中途半端にしないと、もう会わないつもりかよ！」

しかめっつらを浮かべて更に付け加える。

「帰る！」

春は踵を返して背中を向けた。が、その時、コートの袖を何か引っ張った。

「ごめんなさい」

女子高生の声だった。

春は振り返ることはしなかったが、女子高生は更に言葉を続けた。

「今までの人は、私の正体を知った途端、来なくなりました。だからあなたも、もう来ないかと思ってました」

「そんな！ 俺言っただろ！ あのぬいぐるみを意地でも取りたくなかったって」

「・・・そうでしたね」

女子高生は少し涙声になっていたが、春は背中を向けたままで、

やはり振り返ろうとはしなかった。

「昨日はごめんなさい。警備員の人 came たら、急いであなたを解放しなきゃって慌てちゃって。だからつい眠らせちゃいました」

ようやく春は振り返ると、女子高生と向かい合った。

女子高生は申し訳なさそうに俯いていた。

「いい。そんなことより、名前を教えてよ」

「え？ 私のことですか？」

「そう」

茫然とする女子高生に、春は先に名前を名乗った。

「俺は城崎 春」

「わ・私は彩峰^{あやみね} 夏姫^{なつき}です」

こんな展開になるとは露ほども思ってたのか、女子高生は

狼狽気味に名乗った。

「さて、遅い自己紹介も済んだことだし、昨日の続きだ」

「は・はい」

いつのまにか、女子高生の後ろには、ぬいぐるみの入ったユーフォーキャッチャーだけが、闇の中に浮かぶようにしてそこにあった。それ以外には何も見当たらない。

ユーフォーキャッチャーの中では、ぬいぐるみと景品を落とす穴との距離は10センチを切っていた。

「店員がないので、代わりに私がとりやすくしてみました」

悪戯っ子のようにしたり顔で答える女子高生。

彼女の言うとおり、上手くいけば、あと一度で手に入れることができるだろう。

春は小銭を投入すると、早速クレーンを操作した。

しかし、思わぬところでミスをしでかした。

ボタンを離すのが早すぎたため、アームはぬいぐるみを掴めず空振りしてしまった。

「下手っぴ」

先のことはもう吹っ切れたのか、夏姫はくすくすと破顔した。

「な！？ 違う！ 今のは指が滑ったんだ」

春はそう言い訳したものの、本当はわざとミスしたのかもしれない。

もしぬいぐるみを取ってしまったら・・・？ それを考えると、春の手は強張ってしまったていたのだ。

「もう一度だ！ もう一度」

「はい！」

夏姫は胸の前で手を合わせて、再び春が操作するクレーンに眼が釘付けになっている。

とても楽しそうである。

春も夏姫との時間を楽しんでいた。
もし恋人がいたなら、デートとはこんな感じなんだろうか。
・

春が物思いに更けていると、

「あ！」

夏姫が声を上げ、春は我に返った。

目の前で、ちょうどアームが景品穴を真下にして、ぬいぐるみを落としたのである。

取ってしまった。

嬉しいはずなのに、春は素直に喜ぶことができなかった。

夏姫は景品取り出し口からずっと欲しがっていたぬいぐるみを取り出すと、胸の前でぎゅっと抱きしめた。

「ありがとう！」

「あ・ああ」

眩しいくらいに笑みをこぼす夏姫を見ると、春には彼女が幽霊だとは尚更思えず、胸が苦しくなった。

しかし、唐突に、

「はい！」

夏姫は今取ったばかりのぬいぐるみを春に差し出してきたのである。

「え？」

微笑む彼女を前に、春は面食らった。

「俺にくれるのか？」

「うん。だから、大切にして」

「わかった」

春は差し出されたぬいぐるみに手を伸ばすが、はたとその手を止めた。

「なあ？ やっぱり・・・もう会えないのかな」

「え？」

春がぼそつと呟いた言葉に、夏姫は目を見張ると、しゅんとなつてしまった。

そして、俯いたまま答えた。

「・・・うん、これで最後」

春は、やはりぬいぐるみをとらなければよかったと後悔した。

「そっか」

後悔したって仕方がない。春は捨て鉢な思いをおさえながら、夏姫からぬいぐるみを受け取った。

再び顔を上げた夏姫の目は潤んでいた。

「ありがとう。すごく楽しかったです」

「俺もすごく楽しかった。もっと一緒にいたいくらいだ」

「私もそう望みたい。でも、私はもう死んだ人だから」

夏姫はまた微笑みを浮かべると、胸の前で小さく手を振った。

「あなたのことは決して忘れない。私の分まで長く生きてください」

彼女の身体は下半身からどんどん透明になっていく。

「ああ。約束する」

胸の前で振っていた手も見えなくなった。

彼女の顔も、潤んだ瞳も消え、その場にただ一人、ぬいぐるみを抱えた春だけが残された。

彼女と一緒に消えたのか、ユーフォーキャッチャーもいつの間になくなっていた。

春は3階の階段を降りようとしたところで、昨日の警備員に呼び止められた。

「君、また来てたのか？」

「いや、まあ・・・」

春はばつが悪そうに口ごもってしまう。

「あんまり首をつっこむと、幽霊に祟られるぞ」

春の態度に、警備員はそう言って鼻で笑った。

「いや、それはないと思います」

春は強くそう断言した。

「そうなのか？ まあそれより、その手に持ってるぬいぐるみは？」

「これは・・・」

春はゲームセンターで幽霊の女子高生と一緒に取ったと言おうとしたが、直前で言いとどまる。

「・・・なんでもない。俺の私物です」

「そうか」

「じゃあ俺、帰りますんで」

「ああ。気をつけて」

警備員と別れると、そのまま1階まで降りてスーパーを出た。

>

駐輪場に停めてあった自転車に跨がったその時、

「あ！」

春はぬいぐるみを落としてしまったのである。

「大切にしてって言われたそばから・・・」

春がうなだれたその時、落ちたぬいぐるみから何かが転がった。

「え？」

それは丸められた紙だった。

ぬいぐるみのどこかに潜ませてあったようだ。

春はそれを拾って、手の中で広げてみた。

そこには4桁の数字が記されてあった。4桁の真ん中にはハイフンが入っている。

「これって、まさか!？」

春はこの番号が何を意味しているのかが、すぐにわかった。

これは女子高生をひき逃げした車のナンバーではなからうか。

どうするべきか。警察に届けるべきか。

しかし、この番号をどうやって知ったのかと聞かれたら、どう答えればよいのか。

それに、これは本当にひき逃げした車のナンバーなのか。偶然ぬいぐるみに忍ばせてあっただけではないのか。

そうだ。先程すれ違った警備員にこのことを伝えれば、自分が警察に伝えるより都合がいかもしれない、そう春は考え、ぬいぐるみを拾い上げると、再び店内に入ってしまった。

2階から階段を上ろうとした時、3階の巡廻が済んだのか、踊り場を曲がって2階へ下りてきた警備員に鉢合わせした。

「どうした？ 忘れ物か？」

「あの、少しだけ聞いてほしいことがあるんです」

春の眼差しに気圧されたのか、警備員は少し困惑気味に頬をかい
た。

「あ・ああ。別に構わないが」

「あまり目立ちたくないの、3階で話したいのですが」

「わかった」

後ろめたいことは何もないのだが、春は人目のつかない場所で4桁のナンバーのことを伝えたかった。

二人は3階に上がると、薄暗い通路を進み、吹き抜けを過ぎて、ある場所についた。

先程までゲームセンターがあつた場所である。

夏姫はもういないので、ただの空間だけがそこに広がっていた。

「で、話って？」

「これなんですけど」

春はくしゃくしゃになった紙に記された、4桁の番号を警備員に見せた。

「ほう。で、この番号がなんだというのだ？」

「さっき俺が持っていたぬいぐるみの中に、この紙がくしゃくしゃに丸めて隠されていたんです」

春は持っていたぬいぐるみを警備員の前に差し出し、更に付け加える。

「このぬいぐるみは、実はさっきこの場所でもらったんだ」

「すると、また幽霊の話か？」

「その幽霊から貰った」

警備員は目を点にして、呆れ顔だった。

「じゃあ君は、その番号は幽霊からのメッセージで、ひき逃げした車のナンバープレートを示している、とでも言いたいわけだ」

「その通りです。俺が警察に言っただって信じてもらえるかわからない。だから、代わりに行ってもらっても・・・」

「その番号、まだ誰にも教えてはいないんだな？」

春の訴えを言下に、警備員は突然声色を低くして尋ねてきた。

「え・ええ、そうですけど」

「そいつはよかった」

警備員はそう囁いた。春はそれに気づけなかった。

「じゃあ、警察に連絡をとってみようか」

警備員はもと来た道を歩き出し、春が後から続く。

「まさかこんなことになってるとは、夢にも思わなかったよ」

前を歩く警備員から、春はくっくくと不気味な笑い声を聞きたった。

「え？」

「幽霊からナンバーを教えられていたとは……。まだ誰にも知ら

れていないんだな。だっ

たら、お前を殺せばこの番号は再び闇に葬ることができるわけだ」

「・・・どうということ？」

「こういうことだ」

警備員は出し抜けに後ろの春に振り返ると、いつのまに手に持っていたナイフを、春のみぞおちに突き刺した。

「うぐっ!!」

春は体勢を崩し、床にうずくまってしまった。

警備員はにかつと不気味な笑みを浮かべると、ポケットから出したハンカチで、ナイフについた血を拭き取った。

「悪いな。そのナンバーを警察に教えられるわけにはいかないんだな」

俯せに倒れたまま反応のない春に言い聞かせるように、警備員は続ける。

「あの女子高生をひき逃げしたのは私の息子なんだ。私はそれを是が非でも隠し通さなければならぬ」

警備員は春の両足を掴むと、

「ここにはめったに人は上がってこない。ゆっくり死体の処理ができる」

その時だった。

「長谷川！ お前何をしている！」

あまりの驚きで肩を揺らした警備員は、声のした通路の奥へ目をやった。

「な！？」

長谷川と呼ばれた警備員と倒れた春の許へ、突如現れた警備員二人が駆けていたのである。

「ちっ！ どうしてこのタイミングで！」

警備員の長谷川は舌打ちすると、ふと物音を耳にした。

春にはまだ息があった。痛みから身じろぎした際に長谷川に感づかれたのである。

「近づくな！ こいつにとどめをさすぞ！」

長谷川が俯せの春のうなじ辺りにナイフをつきつけようとしたその時、春はがばっと起き上がり、

「ふざけるな！！！」

ずっと握り締めていたままだったかばんを、警備員の顔面めがけてぶつけたのである。

怯んだ長谷川は、ナイフを落つこととした。

「今だ！」

警備員二人が長谷川のもとへ急いで駆けつけると、その身体を押

さえつけ、背中に腕をまわして身動きがとれないようにした。

「縄だ！ 縄を持ってきてくれ！」

警備員の一人がもう一人にそう指示した。

「くっ！ お前！ どうして！」

長谷川は怒気を満面に浮かべ、春を睨みつけた。

その場で突っ立っていた春は、無言のままで徐に足元を見下ろした。

そこにあっただのは、血がこびりついたぬいぐるみだった。

春はナイフで直に刺されたわけではなかった。間にぬいぐるみが挟まったために、傷はそれ程深くはなかったのである。

それでも刺されてはいるのだ。コートの切り口からは血が流れ、黒いコートに染みをつくっていた。

長谷川の動きを封じたままだった警備員がそれを目にし、面食らっていた。

「君！ 大丈夫なのか？」

「ええ。なんとか」

二人のやりとりの傍で、長谷川は憤怒の形相で春だけを睥睨し続けていた。

「お前が・・・お前がこんなところに来なければ、俺と息子は平和に暮らし続けることができたんだ！ お前がここに来なければ！」

長谷川は警備員に固められていた腕を、人並み外れた怪力で強引に解くと、警備員の腕をとって背負い投げした。

そして、落ちていたナイフを拾い上げると、切っ先を春へ向けて突進したのである。

春は恐怖し、切齒した。

傷を負ったせいで逃げることはかなわない。春は死を覚悟した。

（今度こそ殺される！ でもいいか、彼女にまた会えるのなら・・・

）

「来ちゃだめ！」

頭に流れてきたのは女子高生の声だった。

春の隣に、消えたはずの夏姫が立っていたのである。

「約束したでしょう？ 私の分まで長く生きてって」

春は夏姫の凜とした横顔に釘付けになった。

「死ね！」

春の一步前まで長谷川が迫った時、信じられないことが起きたのである。

なんと、長谷川の姿が一瞬のうちに消えたのだ。

「え！？ どうなってるんだ・・・？」

咄然としながら春は隣を見やると、夏姫の姿もなかった。

その場には、背負い投げされて気絶した警備員と、立ち尽くしたままの春だけが残されていた。

長谷川はいったいどこにいったのだろうか？

春は後から縄を持ってやってきた警備員に連れられて、外で待機していた救急車の前までやってきた。

刺し傷は浅くとも刺されたのは事実だからと、救急車を呼ばれたのだ。

ただ、不思議なことに、救急車は2台停まっていた。周りには人だかりができている。救急車が停まっているから集まった、とは言えない程の集まり様だった。

ストレッチャーに座らされた春は不思議に思い、傍にいた救急隊員に尋ねてみた。

「あっちの救急車には誰が？」

「この警備員だよ」

春は、長谷川に背負い投げされた警備員が気絶していたことを思い出すが、その警備員ではないことが、救急隊員が次に言ったことでわかった。

「おそらく君を刺したという警備員だ。通行人の話によると、ナイ

フを握ったまま建物の屋上から落ちてきたらしい」

「え？」

向こうの救急車には長谷川が乗っているというのだ。

ふと建物の方を見れば、警察官が数人ある一角に集まっていた。おそらくは、そこに長谷川が落ちたのだろう。

そこから視線を上げていけば、建物の3階部分はちょうどゲームセンターの入っていた位置に当たった。

救急隊員は、長谷川は屋上から落ちたと言ったが、この屋上は駐車場になっていて、2メートル程の高さの壁が屋上の周囲を囲っている。

それに長谷川は、春に襲いかかった時、目の前で消えたのだ。まるで瞬間移動でもしたかのように。・・・

「瞬間移動・・・まさか!？」

春は悟った。

再び現れた女子高生はあの時、不可思議な現象を起こして、長谷川を建物の外へ瞬間移動させたのではないか。

もちろん、春は信じ切れなかったが、女子高生は幽霊だというのだから、信じないわけにはいかない。

その後、春は救急車に乗せられると、病院へと搬送されたのだった。

>

それから2週間が経過した。

昏睡状態に陥っていた長谷川は、今からちょうど1週間前に意識を取り戻した。

体中のあちこちを骨折しているために、動くことはできないらしい。ゆくゆくは警察に引き渡されるだろう。

それから、長谷川が春に自白していた通りに、息子がひき逃げ犯だと警察に断定され、逮捕されたのである。

4桁のナンバーはやはり事故車と同じものだった。

事故当時、現場に落ちていた車の破片も一致したという。

これにて、ひき逃げ事件は全て解決した。

それから、大型スーパーの3階で女子高生の幽霊が見られるという噂もなくなったという。

また、これも後にわかったことだが、春が刺された際にタイミン
グよく駆けつけた警備員2人は、立入禁止区域である3階への階段
を駆けていく女子高生の姿が見えたので、引き止めようとして追
かけた先で、ナイフを持った長谷川と倒れた春に出くわしたのだと
いう。

つまり、夏姫が警備員を連れてきてくれたのだ。

春は学校からの帰り道に、また大型スーパーの前の通りに自転車
を止め、3階のゲームセンターが入っていた位置を見上げていた。

刺されたみぞおちの傷は大したことはなかった。

しかし、もし間にぬいぐるみが挟まっていなかったら、刃先は確実
に内臓まで達していたらしく、今頃はこの世にいなかったかもしれ
ないと担当した医者に言われた。

春の命を救った猫のぬいぐるみは、彼の部屋の机の上に飾られて
いる。

ぬいぐるみのお腹の部分には綺麗な縫い目が入っていた。

春はぬいぐるみを、夏姫の飼っている猫に逢わせてやりたと思
っていた。しかし、夏姫の住所も電話番号も、彼女の身辺について
のことはなにも知らないのだ。

夏姫の家に行く手段がなかったそんな時、ある女性が春の自宅に
訪れた。

二十代半ばと思われるその女性は、夏姫の姉だった。彼女はお見舞いに来てくれたのだ。

夏姫の姉に、ぬいぐるみと猫を会わせてあげたいという話をする
と、彼女は春を早速家まで案内した。

そして、ぬいぐるみは遂に夏姫の飼っていた猫と対面できたので
ある。

猫の名はアキという。

アキはぬいぐるみと瓜二つと言っていいほどそっくりだった。

アキはぬいぐるみが気に入ったようで、ぬいぐるみの傍から一向
に離れようとはしなかった。

だから、春はぬいぐるみを置いていこうとしたが、

「それは夏姫があなたにプレゼントしたものでしょう？ だから、
あなたが持っていて下さい」

夏姫の姉にそう勧められたのである。

その時に、夏姫の姉がぬいぐるみの傷口を縫ってくれたのだ。

「またいつでもいいので、アキのためにぬいぐるみを持ってきてあ
げて下さい」

帰り際、春はそう言われた。

そしてぬいぐるみは、今もって春の部屋に飾ってあるのである。

春は見上げていた建物から視線を下ろすと、自転車のペダルに足をかけ、通りを駆けぬけていった。

春は心に誓ったのである。

彼女の分まで長く生きよう。例えどんな壁や苦しみが立ちはだか
ったとしても、それを突き破れるくらいに強い人間になろう、と。

・
・
・

5 (後書き)

最後がちゃんとまとまってるかどうかが不安ですが、なんとか完結させることができました。

ここまで読んでいただきありがとうございますm () m

「読んだよ」という報告だけでも構わないので、感想をいただけると嬉しいです。

ただ、誹謗中傷は勘弁願います

また、誤字脱字、矛盾点、言葉の意味を取り違えているなどなど、おかしい部分があれば報告下さい。

今回は暗い話だったので、次は明るい目の話を投稿しようと考えています。

いつ投稿するかは未定ですが・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7824q/>

silence mirage

2011年2月22日12時23分発行